4　ネパール

少女と娘と嫁——衣服さまざま

井上恭子

ビロードのチョロ

「ビロードのチョロ（ブラウス）なんていらないわ」で始まるネパール語の流行歌が、耳について離れない。ネパールに何度か行き、片言のネパール語が判り始めた頃だ。この歌は、出稼ぎに行った夫の帰りを待ちわびる妻の気持ちを歌ったものである。「あれやこれやの贅沢なものはいらない。ただあなたに早く帰ってきてほしい」といった内容の歌詞が、軽快なリズムに乗って歌われていた。

出稼ぎの多い国だから、出稼ぎの辛さ、別離の辛さを歌ったこのような流行歌は、共感を呼びやすい。私がこの歌に親しみをおぼえたのは、それが「ビロードのチョロ」で始まるからだ。改めて回りを眺めると、そこここにビロードのチョロを着た女性たちがいた。この歌から、ビロードのチョロに寄せる女性たちの気持ちを知り、着る物をとおしてネパールへの親しみがさらに少し深まった。

ビロードのチョロがネパール全土の女性の憧れというわけではない。南部の暑い土地ではビロードは願い下げだろう。一方、北部のヒマラヤ地方では、チベット服が着られる。これは、日本の着物に似た打ち合わせの丈の長い服に、たっぷりと長い前掛けを組み合わせるものだから、ビロードのチョロはいらない。ビロードのチョロは、主にネパールの丘陵地帯で、サリーとか腰巻きと組み合わせて着るのである。

ティーズ祭りの日の晴れ着姿の女(中部ネパール)

伝統衣服とジーンズ

ネパールの着物は、多人種国家らしく多様であるが、大別するとチベット系とインド系となる。チベット系の女性は、先に述べたようなチベット服を常用し、インド系の女性はサリーを着る。この他にもさまざまな形の着物がある。たとえば、カトマンドゥ盆地の農業カースト・ジャプーの女性は、上はブラウスで下は短めの腰巻、ウエストには白いサッシュをキリリと巻いている。腰巻は手織木綿の黒地で、裾には沈んだ赤色の幅広の縁取りが織り込んであり、簡素ながら独特のスタイルをもっている。

若い女性の間には、ジーンズやスカート姿も人気がある。面白いことに、ジーンズ、スカートをはくのは、シェルパやタカリといった山岳商業民族の娘たちである。シェルパやタカリには、

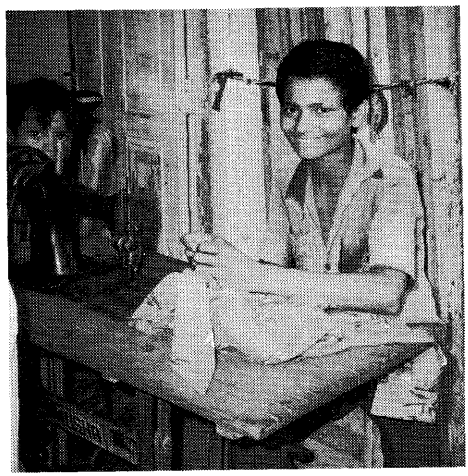
商業を通じた現金収入があり、値段の高いしゃれたジーンズでも買うことができる。また、ヒマラヤ登山ルートに住み、外国人との接触が多いことから、異なった衣服への抵抗感が少ないことも理由であろうか。インド系の女性のジーンズ、スカート姿は、家庭内はともかくとして、外では見かけない。

仕立屋ダマーイー　ネパールの縫製品産業は、絨毯産業と並んで輸出の花形となっている。先進国への低価格の既製服が中心である。しかし国内市場向けの縫製品産業は未成熟である。市場が限定されていること、需要が少ないこと、需要の多くはダマーイーと呼ばれる仕立屋カーストが注文主の求めに応じて縫ってくれるため、わざわざ既製品を買う必要がないのである。それに、さまざまなスタイルと異なるサイズの民族服は、工場で作るよりもダマーイーに頼むほうが安く、注文主の好みも反映できる。

手軽さもダマーイーの長所である。筆者は、ネパールの地方のある村で、雨に降られて全身はもとより荷物すべて濡れてしまったことがある。体が冷えて寒くはなるし、泥道で滑って転んだためにズボンは泥漬けになっている。せめてズボンだけでも取り替えたいと思ったが着替えも濡れてしまっている。諦めかけたところに雑貨屋があり、布を置いていた。店先ではダマーイーが仕事をしている。そこで、布を買い、両端を縫い合わせて腰巻きを作ってもらった。〝インド〟製の生地を使ったので値段は高くなったが、地元の人が着ているのと同じ腰巻きである。ダマーイーの便利さを実感した。ちょっとした場所にはこのように雑貨屋があり、ダマーイーがいる。

町では布屋の店先でダマーイーがミシンを動かしている。

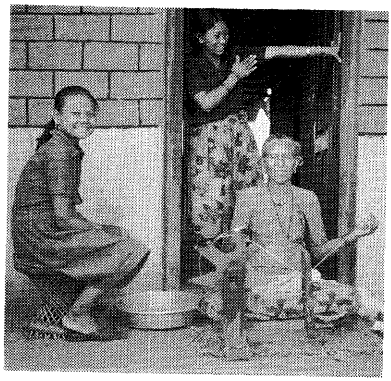
既製服の進出　ダマーイーは、村人に用役を提供して代償を物や金で得て生計を営んできた。しかしダマーイーのくらしも時代の波で苦しくなってきているようだ。需要が変化してきていることが大きな理由である。Tシャツ、ズボンといった簡単な既製服が普段の服として好まれるようになったためである。この傾向は若い層ほど顕著である。このような需要の多様化、変化に、ダマーイーの技術はなかなかついていけない。また、ダマーイーの経済・社会的地位の低さが、需要の変化への彼らの対応を困難なものにしている。新技術取得の機会がなく、その余裕もないからである。しかし、カトマンドゥのような都市では、観光みやげ用の縫製品製造に転換するなどの対応も見られる。このことは、もし適切な近代的技術を取得できれば、ダマーイーの生産活動を新たな方向に発展させる可能性があることを示している。



仕立屋カースト・ダマーイーの少年。
布屋の片隅で働く（東ネパール）

既製服はほとんどすべて外国からくる。その多くは中古衣料である。カトマンドゥ市内の広場にたつ中古の衣料市場では、セーター、トレーナー、ジャケット、シャツなど実に多様な衣料が売られている。日本のクリーニング屋のマークのついたものがけっこう多い。このような中古衣料の流入が、ダマーイーの生活を脅かしているであろうことは容易に想像できる。

新品衣料は「運び屋」が持ち込んでいる。バンコク空港や香港、シンガポール空港でカトマンドゥ便を待っている人のなかに、着れるだけの着物を着込んで着膨れて湯気を立てているネパール人旅行者を見る。彼らは「運び屋」である。持ち帰り手荷物としてさまざまな商品をネパールに持ち込むのであるが、新品衣料の多くはこのようにして運ばれている。さきに述べたようなジーンズとかスカート、それにあわせたブラウスなどはこうした輸入品が多い。



糸繰り中の婦人（ポカラ市内）

子供の着る物

ジーンズやスカートを愛用するシェルパやタカリの娘たちも、結婚すると伝統的な衣服を着るようになる。娘時代は着る物で少々はみ出しても、結婚すれば嫁として伝統的な社会構成の中で然るべき地位におさまるわけである。それなりの衣服をまとうことが要求される。この点は、インド系の女性も同

様である。娘時代に、家庭内でジーンズ、スカートをはいていても、結婚するとサリーである。ジーンズ、スカートは、どちらの社会においても、既婚婦人の衣服として認知されていない。

もう少し小さな女の子の衣服を見ると、チベット系とインド系で非常に異なる点がある。それは、チベット系の女の子は大人の衣服の雛形つまり子供サイズのチベット服を着ているのに対して、インド系の女の子は、上着とズボン、またはワンピース様のものを着ている。体に巻き付けるサリーは、子供には無理だから当然とはいえ、この衣服の違いは興味深い。インド系の社会では、少女が大人になりサリーを着ることが、文化・社会的に何か特別の深い意味を持つのであろうか。

サリー姿のマヤ　サリーで思いだすのは、マヤという少女のことである。マヤは、ポカラ市に住む友人（日本人）宅で働いていた少女である。十五歳だが、十歳そこそこにしか見えない小柄な女の子であった。陽気で、利発で、おしゃべりで、一生懸命に働く子であった。家はバウン（バラモン）で、土砂崩れで畑が流されたために山を捨てて町に出てきた、したがって生活は苦しい、というわけで友人宅に働きに来ていたのであった。

その翌年、友人宅を訪れた時、マヤはいなかった。嫁に行ったという。マヤの嫁ぎ先に行ってみよう、ということで夕方出かけた。嫁ぎ先は近郊で、そこそこの土地を持ち雑貨屋も営む家族で、マヤは次男の警察官に嫁いだ。家族はチェットリ（クシャトリヤ）だから異カースト間の結婚であるが、マヤの親としては、土地持ちの家族の次男でサラリーマンとの結婚は好条件である。

嫁ぎ先のほうは、マヤの家が貧しいのが難点ではあるが、最高位カースト・バウンの娘という魅力がある。マヤが外国人の家庭で奉公していたことも好まれたようであった。マヤに初潮が来るとすぐにこの縁談が進められたという。

ほの暗くなってマヤの家に着いた。マヤが畑から飛んで戻った。去年は、上着と腰巻の簡単な姿で働いていたマヤが、今はサリー姿である。小柄すぎてサリーがさまになっていない。変わったことはサリーだけではない。陽気で弾んでいたマヤが、暗い顔で、姑や兄嫁との関係のむずかしさや、家庭の苦労などを堰を切ったように話し始めたのだ。ちょうど家人が不在だったこともあって、溜まっていた不満のはけ口となったようだ。

そのうち家人が野良から戻り、マヤは炊事を始めた。竈があるだけの暗い土間である。電気は来ていない。持て余し気味のサリーの端を気にしてひっきりなしに直しながら、屈みこんで働くマヤの姿は、竈の明りで暗さが際だって見えた。マヤはごく普通のネパールの女である。マヤの生活も、背負っているものも、ほかの女たちと大差はない。感情的な思い入れは何の意味もないし、マヤの生活は経済的な面では決して悪くない。それはわかっていても、陽気なおしゃべりのマヤが、嫁となり、慣れないサリーを着て黙々と婚家の竈に向かう後姿を見た帰り道は、辛かった。

（いのうえ　きょうこ／アジア経済研究所動向分析部）